

「共通価値観」から「東アジア共通価値観」へ

朱 建 栄

ブルンクホルストとフィニの両先生は非常に興味深い話題を提示してくれた。ブルンクホルスト先生の「グローバルな覇権主義」という表現を現在のアメリカに当てはめるのであれば、それは最も的確であろう。一方、フィニ先生が描写している1930年代のヨーロッパにおける反アメリカニズムは1990年代後半の中国を思い出させる。両先生の分析は何れもアメリカニズムと呼ばれるものをヨーロッパの経験、或は西洋文明という視点から捉えている。以下では、コメントというよりも、両先生の話から考えさせられたことを、中国と東アジアの視点からまとめた。

まず、中国の視点から見ることにしよう。1996年に中国で出版された楊玉聖氏の『中国人のアメリカ観—ある歴史の考察』という書物の最初の言葉は「中国人にとって、アメリカという国は謎である」。アメリカに対して、中国政府と一般市民の反応は常に温度差があったと言われているが、1999年5月に起きたアメリカ軍用機による駐ユーゴスラビア中国大使館の「誤爆」は、中国全土の怒りをかうことになった。神戸大学の王柯教授は「中国国民のアメリカ認識の歴史の変遷」という論文で、そのことについて、次のように述べている。「1918年11月30日の夜、第一次世界大戦の勝利を祝うため大行進する北京の大学生はアメリカ大使館前に集まり、「アメリカ万歳」と叫んだ」。ところが、1999年5月のアメリカ軍用機による中国大使館の「誤爆」に対し、北京の大学生はアメリカ大使館前でアメリカ国旗を燃やすなどで、抗議行動を起こし、「アメリカ万歳」が象徴するような中国国民のアメリカに対する尊敬と期待は、20世紀の終焉を待たずに幻のような過去となった」。そのことはフィニ先生が言っている20世紀30年代のヨーロッパとよく似ている。もし、中国に反アメリカニズムというものがあるとするなら、それはヨーロッパとは若干異なる。

中国における「反アメリカニズム」は1999年の「誤爆」事件以前に既に始めていた。1994年に中国青少年研究所が実施した中国の世論調査では、6割以上の中国人がアメリカをもっとも嫌う国としていた。それは、アメリカ発の「中国脅威論」に対する中国国民の反発だったと思われる。更に遡っていくと、清朝末期のアメリカ人による中国労働者に対する非人道的な扱いと人種差別が中国国民の感情を深く傷つき、反アメリカニズムというよりも、反米意識と言った方が適切かもしれないが、そのようなものがその時代にもあった。文化的、或は政治的に反アメリカニズムを掲げたのは1996年に出版された『ノーと言える中国人』だったと思われる。その根幹をなすものは、アメリカに対する失望と、フィニ先生も指摘しているアイデンティティというものである。一部の人が『ノーと言える中国人』は民族主義的なものだと言っているが、実は著者たちはフィニ先生が描いている30年代の

ヨーロッパと全く同じく、失望したアメリカニズムに対抗し、真剣に自分たちのアイデンティティを探し求め定義しなおそうとしているだけである。中国では「深く愛すれば、そこから生まれた恨みも深い」ということわざがある。その本の著者たちはかつて、アメリカン・ドリームを深く信じ、「アメリカ文化」を愛していた人たちである。「われわれのアメリカを批判する感情を煽ったのはアメリカ人である」と李希光・劉康の著書で書かれているように、中国によるアメリカ批判は本気のようにあり、アメリカン・ドリームから少しずつ目が覚め始めている。

次に、東アジアの視点で考えてみる。まず、アメリカニズムが東アジアに浸透する例として、「共通価値観」というものを取り上げよう。「共通価値観」はアメリカと日本などが共通して持っている民主主義体制とその理念などについて使われている言葉である。そもそも「共通価値観」とは何かについて、谷口誠・元日本国連大使が『東アジア共同体』という著書で、次のように述べている。もし、「共通価値観」はOECDが掲げている「民主主義」「市場経済」「人権の尊重」の三つの概念を意味するのであれば、理解することができなくはない。しかしそれがより広い一般的価値観をも含めるのであれば、日米間で同じ価値観を共有しているかどうかは疑問である。

谷口氏は「共通価値観」というのが西洋文明の上には成立するものと考え、アメリカニズムの東アジアへの浸透を条件付で認めている。しかし、われわれが日常「欧米」と呼んでいるように、東アジアからしてみれば、アメリカニズムは西洋文明の一部、少なくともヨーロッパと同じ文化圏だと理解している。そのヨーロッパすらアメリカニズムに対し、「西洋文明の岐路」と危惧されているように、アメリカ的な価値観（フィニ先生はそれを「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」と呼んでいるが）を伝統的な西洋文明と区別しようとしている。その意味では、われわれの「欧米」という考え方には誤差があると認めざるを得ない。そうすると、前述の「共通価値観」というものが何を基準にして「共通」と言えるのであろうか。「民主主義」体制＝「共通価値観」というのが考えられるかもしれない。しかし、いわゆるアメリカ的な「民主主義」体制＝「共通価値観」に対し、次の疑問が残される。

「デモクラシー」という概念は別に今日に生まれたものではなく、古代ギリシアで既に唱えられ、模索・実施されてきた。それが18世紀以降、まず欧米また別の地域の国々で近代的な政治制度となり、主に複数政党制、総選挙などの形に現れた。20世紀前半、日本やドイツでもそれが制度的に導入されたが、戦争を阻止できなかった。戦後、それが再スタートし、多くの自己修正・改善・発展があり、今日の日本・アメリカ・EUの共通した政治制度になっている。それに多くの長所を持ち、少なくともスターリン型の社会主義より優れていることは歴史が証明している。特にその対立面とされた旧ソ連が崩壊したことで、「民主主義」の体制が普遍性をもっているように思われるようになった。

しかし、それを過度に美化することもできない。1950年代半ば、スエズ運河戦争（第二次中東戦争）の時、アメリカ的な「民主主義」国家を巻き込んだ戦争の危険性が一時、漂った。ベトナム戦争などに見られたように、他国の人間を大量に殺戮し自然環境を無差別に破壊することも回避できなかった。

た。それは正に、フィニ先生が言う西洋の善悪論を受け継いだアメリカがみずからの価値観を世界に押し付け平板化しようとした実例である。また、「民主主義」体制の中で、ハリケーンが襲ったニューオーリンズで露呈した民族差別、貧富の格差が是正されていないことも明らかになった。複数政党制と総選挙などを特徴とする「民主主義」体制は結局、経済と社会の発展がかなり進んだ段階になって初めて有効に働くもので、それ自身も絶えず改善していくものである。

アメリカ的な「民主主義」が「善」たるものであり、「民主主義」体制＝「共通価値観」と考えるなら、次のことはどのように理解されるのであろうか。

- (1) 民主主義体制をとる多くの第三世界の国では貧困など人類の基本的ニーズの問題を解決できていない。世界最大の「民主主義」国家であるインドは今もなお、人間を生まれつきで階級に分けるカースト制度を解決していないし、ラテンアメリカの大半の国も一応民主化しているものの、特権階級の支配、貧困などの問題を解決できていない。それどころか、工業先進国が多く、途上国の発展のチャンスを奪っていること（南北問題）も指摘されている。
- (2) 「民主主義」体制になったからといって、すべて「善人」になり「善行」をし、独裁を阻止したわけではない。その体制を取る多くの途上国でクーデターや独裁、ないし民衆の反乱が度々起きている。ロシアが一旦「一党独裁」をやめて「民主主義」の体制になったものの、その国内で多くの反民主主義的な動きが出ているとも指摘されている。なお、「民主主義」体制になったロシアが民族独立を要求するチェチェン共和国で武力を行使しており、それが西側諸国でも黙認されている。
- (3) 「民主主義」体制ではないとされる中国はこの20年、世界的に見ても、発展が最も早く、貧困人口の減少が最も著しい国になっている。そして中国の中でも、経済と社会の発展、中間層の拡大にともなって、全ての農村の村レベルでは直接選挙が導入されており、政府・政策に対する民意の監督が幅広く取り入れられ始めている。

これで考えれば、いわゆる「共通価値観」は文明論的な意義、世界の融和と協力を促進する意義は見られなく、東アジアに適応したものとは考えられにくい。むしろ、東アジアとしては、その地域にある共通的な「価値観」、いわゆる「東アジア共通価値観」を考えなければならない。

「東アジア共通価値観」をめぐる探求は東アジア諸国と地域の共同作業で進めなければならない。それを通じて、この地域に対して少なくとも次の意義があると考えられる。

- (1) 社会と文化など各方面における共通点の探求を通じて、今の日中韓の間に存在する摩擦と対立を乗り越えるのに大局的な視野を提供することになる。これらの摩擦は巨視的に見れば、

ある歴史段階に属する現象で、それを誇張し絶対化する必要はないし、すべきでもない。

- (2) 国際政治における大国の思惑などや東アジア諸国間の対立を超越し、地域内各国の平和と相互理解を促進し、「東アジア共同体」の形成にとっても理論的準備になる。ヨーロッパの戦後の歩みから見れば、それは共同体を構築する上で必要不可欠な基礎作業の一環である。
- (3) 最終的には、西洋文明と現代工業社会の長所を確認しつつ、その問題点を発見・克服するためのヒントを見出し、全世界の未来のために東洋文明を再貢献するための基礎作業にもなるであろう。



From “Universal Values ” to Shared East Asian Values

Jiang Rong ZHU

Both Professors Brunkhorst and Fini have presented upon extremely interesting topics. If one were to apply Professor Brunkhorst's expression “global hegemony” to contemporary America, it does seem to be most fitting. Professor Fini's description of the anti-Americanism in Europe in the nineteen thirties (1930's), on the other hand, reminds me of China in the latter half of the nineteen nineties (1990's). Both Professors Brunkhorst and Fini's analyses treat Americanism from the perspective of the European experience and the Western Enlightenment. Rather than making comments, I would like to treat the issues that their papers raised for me from the perspectives of China and East Asia.

First of all, let us look at things from the perspective of China. The opening line of a book by Yang Yu Sheng (楊玉聖) published in China in nineteen ninety-six (1996) entitled *The Chinese View of America: An Historical Examination* reads as follows: “For Chinese people, the country called America is an enigma.” It has long been said that the attitude of the Chinese government and that of the average citizen towards America are of differing degrees. However, the so-called “mistaken bombing” of the Chinese embassy by American warplanes in former Yugoslavia in May of 1999 incited the anger of all of China. In an essay entitled “The Historical Vicissitudes of the Chinese People's Perception of America,” Professor Wang Ke (王柯) of Kobe University writes as follows about this incident: “On the evening of November thirtieth (30th), nineteen-eighteen (1918), students of Beijing University conducted a grand march to celebrate the victory of the First World War, and gathered at the American embassy where they shouted ‘Long live America!’ However, in opposition to the “mistaken bombing” of the Chinese embassy by American warplanes in May of 1999, the students of Beijing University engaged in various acts of protest, among which, they burned the American flag in front of the American embassy. The respect and expectations that the Chinese people had for America, symbolized in their shout of ‘Long live America!’, became something like an apparition from past, even before the twentieth century had ended.” This very much resembles the Europe of the nineteen thirties (1930's) that Professor Fini is talking about. If we assume that there is such a thing as anti-Americanism in China, it is somewhat different from that of Europe.

“Anti-Americanism” in China had already begun before the time of the “mistaken bombing” incident of 1999. In 1994, the Chinese Young Peoples Research Center carried out a public-opinion poll in which more than sixty percent of Chinese people viewed America as their most hated country. It is thought that this was a reaction to the American discourse that labelled China as a “menace.” Moreover, if we go further back in history, the inhumane treatment of, and prejudice towards, Chinese laborers by Americans at the end of the Ch'ing dynasty deeply affected Chinese sentiment. While it may be more appropriate to call this an “anti-American consciousness” than “anti-Americanism,” this sort of feeling was also present at that time. It is thought that anti-Americanism in the

cultural and political sense was broached in the book entitled *Chinese People Who Can Say "No"* published in 1996. The basis for this was disappointment in America, as well as an issue of identity as Professor Fini has also pointed out. While there are some who say that *Chinese People Who Can Say "No"* is a nationalistic tract, in fact, the authors are confronting a disappointment in Americanism in the exact same way that Professor Fini has described for Europe in the nineteen thirties (1930's). The authors are merely attempting to seek and re-define their own identity in a serious way. In China there is a proverb that goes, "If one loves deeply, the hatred born from this will also be deep." The authors of this book once believed profoundly in the American dream and loved American culture. Statements such as "It is Americans who have stirred up our passion to criticize America," found in Li Xi Guang and Liu Kang's (李希光 · 劉康) book, show the earnestness of the Chinese criticism of America, and that China is gradually beginning to wake up from the American dream.

Next, I would like to consider these issues from the perspective of East Asia. First of all, as an example of the penetration of Americanism into East Asia, I would like to take up the notion of "common values." The phrase, "common values," is used to refer to the idea that America and Japan, among other countries, have a commonly held democratic system. Addressing the question of just what the phrase "common values" actually means, Taniguchi Makoto, Japan's former ambassador to the United Nations, wrote in his book entitled *The East Asian Community* that if "common values" means the three principles of "democracy," a "market economy," and "respect for human rights" as defined by the Organization for Economic Cooperation and Development (OECD), there is no difficulty in understanding this. However, if we take the notion of "a value system" in a broader, more general sense, it is doubtful that Japan and America hold the same set of values in common.

Mr. Taniguchi regards the the phrase "common values" as being a product of the Western Enlightenment, and sees the penetration of Americanism into East Asia as conditional. However, just as we routinely use the phrase "Europe and America" (in Japanese, "ōbei"), if we view things from the perspective of East Asia, Americanism is a part of the Western Enlightenment, and, at the very least, is perceived as part of the same cultural sphere as Europe. Even Europe, in confronting Americanism, is trying to distinguish an American sense of values (what Professor Fini calls "the American way of life") from that of the traditional Western Enlightenment. This means that we must recognize that our way of viewing "Europe and America" as a singular entity is mistaken. If this is the case, what is the criteria for "commonness" in the above-mentioned "common values?" Perhaps it is thought that a democratic system equals "common values." However, against the notion that the American democratic system embodies these "common values" the following doubts remain.

The concept of "democracy" is not of recent origin, but was already advanced, experimented with, and implemented in ancient Greece. It first became a modern political system from the eighteenth (18th) century in Europe and America, and then afterwards in other countries, mainly taking the form of a multiple party system with general elections. In the first half of the twentieth (20th) century, this was systematically introduced in both Japan and Germany, but was unable to prevent war. After the war, it was restarted with many modifications, improvements and developments, and is today the common political system of Japan, America and the European Union (EU). It has many strong points. To say the least, history has shown that it is superior to Stalinist socialism.

Especially on account of the collapse of the former Soviet Union, the democratic system has come to be seen as possessing universality.

However, we cannot overly glorify democracy. In the middle of the nineteen fifties (1950's), at the time of the Suez Canal War (also referred to as the second Middle East War), the danger of American-style democratic nations being dragged into a war was, temporarily, a genuine possibility. And, as can be seen from events like the Vietnam War, democracy could not prevent the mass slaughter of human beings of other countries and the indiscriminate destruction of the natural world. This is surely one instance of what Professor Fini calls America's attempt, grounded in the Western discourse of good and evil, to impose its own values upon the world—that is, a levelling of values. Again, as exposed in hurricane-struck New Orleans, it has become clear that the racial prejudice and disparity between rich and poor in a democratic system has not been rectified. A democratic system, characterized by such things as a multiple party system and general elections, will only function effectively when its economic and social development has reached a significantly advanced stage, and when it continually reforms itself.

If American-style democracy is a "good" thing, and having a "democratic" system is equivalent to having "common values," how are we to understand the following three points?

- (1) First, although they have adopted democratic systems, in many third world countries there has emerged no solution to such problems as poverty and the provision for basic human needs. Moreover, today, in the world's largest democratic nation, India, a caste system that assigns status to human beings from birth has not been done away with. Also, although more than half of all Latin American countries have become somewhat democratic, there has been no solution to such problems as the dominance of privileged classes and poverty. On the contrary, this indicates that the leading industrial countries are, in many ways, robbing developing nations of their chance to prosper. (This is also called "the North-South problem.")
- (2) It does not follow that because a nation becomes democratic, all become "good people" and perform "good deeds," and that dictatorships are prevented. *Coups d'état*, dictatorships and civilian revolts occur repeatedly in many developing countries that have adopted a democratic system. Although Russia ended its former "one-party dictatorship" and has become "democratic," there are indications of many anti-democratic movements appearing within the country. Moreover, "democratic" Russia is using military force, with the tacit approval of the Western nations, in the Chechen Republic, which is seeking its national independence.
- (3) China, which has not adopted a "democratic system," is the country that has had the most rapid development anywhere in the world, and has had the most conspicuous reduction of poverty. Also, accompanying this economic and social development and the enlargement of the middle class in China, direct elections are being introduced at the village level nationwide, and the supervision of government and government policy according to public consensus is beginning to be widely adopted.

When we consider this, it is not possible to see the promotion of world harmony and cooperation, or the promotion of so-called “common values” in the Enlightenment sense of this phrase, and it becomes difficult to view such “common values” as something appropriate for East Asia. Rather, we must consider for East Asia a “sense of values” common to the region—“common East Asian values.” We must promote the search for such a “common East Asian values” as the collaborative work of all East Asian countries and regions. This has, at the very least, the following three points of significance for the region:

- (1) The search for common social, cultural and other elements would allow for the broad view needed to overcome the friction and confrontation and that exists today between Japan, China and Korea. If the various points of friction are examined closely as phenomena belonging to a certain historical stage, there is no need to, and we should not, exaggerate or absolutize them.
- (2) East Asia will transcend the ulterior motives of the superpowers in international politics, as well as the opposition between its own nations; it will promote peace and mutual understanding among all countries in the region; and the “common East Asian values” will serve as the theoretical underpinning for the formation of an “East Asian Community.” If we look at the course of post-war Europe, this is one necessary and indispensable part of laying the foundations for the construction of community.
- (3) Finally, while acknowledging the strong points of the Western Enlightenment and of contemporary industrial society, hints for identifying and overcoming their problematic aspects will be discovered. And, this will perhaps become the groundwork that allows the East Asian Enlightenment to again make a contribution to the future of the entire world.